

集会では、同告訴団の弁護士を務める海渡雄一弁護士がパワーポイントを使い、6月30日に開かれた初公判で明らかにした事実を解説。2006年以降、東電社内では10メートルを超える大津波への対策が検討され、09年6月までにその対策を完了させる計画があった事実や、その後、この計画が先送りされて葬られた事実。そして検察や政府事故調査委員会はこの事実を把握していながら隠蔽し、不起訴処分としていた事実などが紹介され、海渡弁護士は「このパワーポのデータは皆と共有する。これを使って誰でも説明できるようにしてほしい」と訴えた(パワーポのデータは<https://shien-dan.org/20170902action-report/>で公開中)。

同告訴団の刑事告訴が東京地検で不起訴処分とされた際、同告訴団側は担当検事から「防潮堤は南側だけに作る計画で、たとえ作っていたとしても事故は防げなかった」「防潮堤の完成予想図もなかった」などと説明されていた。だが初公判では、原発の敷地を取り囲む防潮堤の立体図が登場。検事の説明が虚偽だったことが判明している。このようにして同原発事故は「捜査結果隠蔽事件」の様相を呈してきた(この隠蔽についての詳細は海渡氏らの共著「強制起訴 あば

かれた東電元最高幹部の罪」(三石版・金曜日)参照のこと)。

白石昇一郎・ルポライター

### 自然エネルギー、住民主体で 風力の低周波音問題訴える

北海道石狩市では新港地区に46基もの大型風力発電所計画が集中し、低周波音によって小樽市や札幌市を含む広範囲で健康被害が発生するという予測もある。

市民団体「石狩湾岸の風力発電を考える石狩市民の会」の会員は、7月下旬、4基の着工を確認。8月20日には札幌からの参加者を含む市民約30人が参加して石狩市中心部でデモを行ない、風車による健康被害のリスクを訴えた。

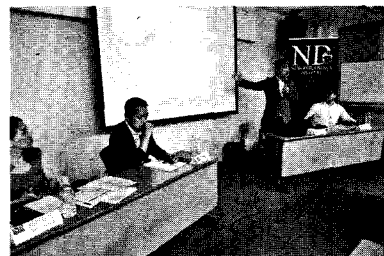
北海道自然保護協会も、8月9日、札幌市長宛に要望書を提出。札幌市として独自に低周波音の調査を行なうほか、被害が出た場合の対応について事業者と事前に協議すること、協議会には市民代表を参加させることなどを求めた。

日本社会医学会は、8月19日、北海道医療大学で「北海道のエネルギー問題と健康」をテーマにシンポジウムを開催。北海道大学の研究者3名が講演を行なった。

環境創生工学部門教授の松井利仁氏は、日本では健康影響を考慮せずにエネルギー政策が決定され、公害事件後も経済的利益が判

### NDが辺野古代案、米側に提示で報告会

沖縄・辺野古への新基地建設を止めようと、日本の民間シンクタンク「新外交イニシアティブ(ND)」が米ワシントンを訪れ、米連邦議会関係者らに提言した海兵隊の運用を見直す代替案の報告会が8月29日、東京・千代田区内で開かれ、市民ら約90人が参加した。ND事務局長の猿田佐世弁護士は「米国務省職員や米議会上・下院補佐官などに接触でき、初めて軍事に関する議論のテーブルに着けた感触を得たのが最大の成果」と述べた。



提言内容を説明するND評議員の元沖縄タイムス論説委員・屋良朝博氏。東京・千代田区。

「辺野古が唯一の選択肢ではない」として、NDが政策提言したのは①在沖米海兵隊の前方展開部隊「第31海兵遠征部隊(31MEU)」の拠点を沖縄以外に移転②アフガン攻撃、イラク戦争で、国際問題は武力では解決できない現実を受け止めた米政府が、米軍を使って貧困や格差の解消に取り組んでいることや、自衛隊も頻繁に国内外の災害救援に出動している現実から日米合同の任務部隊「日米JOINT MEU for HA(人道支援)／DR(災害支援)」を常設③同部隊のアジア全域をエリアとする連絡調整機能を沖縄に置く—など。

辺野古が唯一ではないことを、「米国発」の形で日本政府に逆提言させることを目指す新たな挑戦だ。普天間基地移設問題に対する代替案として、今後はコスト面でもND案の有利性を示していくことが課題だろう。

文・写真/小宮純一・ジャーナリスト

断根拠になつていっていると批判。有機水銀説を否定して対応が遅れた水の類似性を指摘した。

情報科学研究科教授の北裕幸氏は、家庭で利用されるエネルギーの用途は冷暖房や給湯、調理などの熱利用が過半数を占めているのに、それらを主に電力として供給している点を指摘した。

大気環境保全工学研究室助教の山形定氏は、発電時に発生する熱も無駄なく利用する小型の木質

バイオマスガス化発電の例と、再生可能エネルギー固定価格買取制度によって大量の木質バイオマス発電所が稼働し、間伐材の価格が上昇している問題を報告。間伐材から作る家畜の敷料の価格高騰、過剰伐採による森林資源の枯渇も懸念されているという。

「経済ベースでエネルギー問題を考えるのではなく、地域住民が主体となって事業を行なう必要がある」と山形氏は考えている。

加藤やすこ・ジャーナリスト

っと思えた。あまり気張らず自然体で発電している梶原町。

◎ 「日本と再生」の映画の中で原子力発電はもう時代遅れ。これからは自然エネルギーの時代だと語っていた。

いまだに老朽原発にしがみつき、劣化部

分が事故るのではないかとハラハラしながら再稼働している日本は愚かと言うか、こっけいだ。

宿でも「菜の花バッジ」を差し出したら、受付嬢同様喜んで受け取ってくれた。

---

## 「風力発電=エコ」の迷信を 脱却されんことを願っています

藤井廣明（風車問題を考える住民の会・町会議員）

鳥居光代様

原発反対で奮闘されているたんぼぼ舎の皆様  
様に連帯致します。

しかし、原発に反対→自然エネルギーへ、  
という流れの中で未だもって「風力発電礼賛」  
の方がおられるのは残念至極です。

風車は、一見エコで自然に見えますが、自然破壊、景観破壊、何より人に低周波音被害を与えます。せつかく四国までいらしたのなら愛媛県佐田半島、又和歌山県の由良町ほかで風車被害に苦しむ人になぜお会いしなかったのでしょうか？

（由良町の谷口愛子さんは風車の低周波音に苦しみながら最近亡くなりました）

この頃は、洋上風車に問題は移っている（村上市、上関町）ようですが、建ってしまった所の人々の苦しみが無くなったわけではありません。

東京近くでは伊豆半島の東伊豆町、愛知県

田原市などで被害者は苦しんでいますし、外国を含め風車病に苦しむ人の実例は枚挙にいとまがありませんが、原発反対、自然エネルギー賛成の皆さんのなかには全く反省もなく無知をさらけ出し、現に苦しんでいる人や、北海道はじめ現在風車建設に必死で反対している人たちに敵対している方が見受けられるのは悔しい限りです。善意だけに残念でなりません。

風車被害者とともに嚴重に抗議し、一日も早く「風力発電=エコ」の迷信を脱却されんことを願っています。

（なお、東伊豆町営の風車3機のうち1機が基幹的故障、赤字転落必至となりました。同じく三筋（みすじ）山に立つ21機も2年も経たないで今年4月、1機焼損、全機が停止となりました）